

うえすとさいど

ヒーローショーを熱演、寄贈用のイス制作や川の清掃 大阪府立みどり清朋高校「地域貢献部」の活動

みなさん「中河内戦隊セイホウジャー」って、ご存じですか。毎年2月に開かれる『バリアフリーな街ふせ』で昨年から2年連続で出演、会場を走り回って楽しいショーを繰り広げてくれた「ヒーロー戦隊」です。あの「ヒーロー」の中の顔は、大阪府立みどり清朋（せいほう）高校「地域貢献部」のみなさんです。大阪府と同教育委員会が主催する「こころの再生府民活動」（主催）の2024年度表彰校としても選ばれたユニークな「部活」に密着取材してきました。

みどり清朋高校は、東大阪市の北東部、八尾市に隣接している池島町にあり、西側を恩智川が流れ、北側には恩智川治水緑地のある緑豊かな環境です。取材に訪れた4月中旬は川沿いの土手が菜の花の黄色でうまっていました。

学校の横を流れる恩智川



み、それを透明な樹脂レジンでコーティングすると、水中を魚が泳いでいるようなアクセサリーが出来上がります。これを「ガチャガチャ」の中身にしてゲーム性を加味して販売するそうです。

部長の松田小春さん（3年）によると、放課後や校内での活動のときは保育園や福祉施設に贈るための椅子やプラバンづくり、ヒーローショーの練習をしています。松田さんは2年のときに転校してきたそうで「よそにはない地域貢献部の存在を知り、部活することで人の役に立てるっていいな



部長の松田小春さん、実は悪役スターとか!!

と入部しました。福祉施設の訪問や校外のイベントに参加するなど普段できないような活動ができますよ。ヒーローショーでは、私は悪役を演じているんですよ。怖がってもらえた時は、うまく演じられたんだと思ってうれしくなります。子どもたちがヒーローに寄っていくのを、悪役をしながらほほえましく見ています。『ありがとう』といわれることもあって、とてもうれしい

かわいらしい松田さんが悪役をしてい

たなんてびっくりです。「悪役の姿をしていて普段の自分じゃないので思い切った演技ができますよ。恥ずかしいと感じることはないけれど、素顔になって人前に出るのは厳しいですね」

そして2年生の松家さん（⑦左から3番目）は中学生のときに学校説明会で、地域貢献部が川の清掃活動をしていると聞いて「カッコいい！！」と感激。「貢献部の活動をしたいので、この学校にきました」と頼もしい。

（2面につづく）

迫力あふれるヒーローショー
=昨年2月の「バリアフリーな街ふせ」

①みどり清朋高校地域貢献部のみなさん
②地域貢献部のインスタはこちら。出演依頼もこちらから！

アイデア多彩 「こころの再生」府民活動でも表彰

■ サッカーチーム員と始めた文化祭のショーがきっかけ

みどり清朋高校地域貢献部の存在を知ったのは「バリアフリーな街ふせ」のイベントに出演してくれる団体を探すために、東大阪市社協のボランティア登録の名簿を閲覧したことから。「高校生がこんなことしてくれるんや」と驚きました。

イベントで披露してくれた「中河内戦隊セイホウジャー」のユニークな点は、仮面姿の演じ手は「全員台詞（せりふ）がない」こと。予め録音した台詞や効果音を再生し、それに合わせて体を動かします。録音は普段の活動の中で部員がそれぞれに行います。気になるストーリーは顧問の野口雄史先生の考案だとか。

こうした活動は野口先生が、同じ東大阪市にある前任校で始め、みどり清朋高校でも引き継いだといいます。きっかけは前任校で顧問をしていたサッカーチームの部員たちから「文化祭で何か面白いことをしたい」と相談を受けたことから。

「歌やダンスだと上手な子だけにスポットが当たる。部員全員が見せ場を作れるものを」と考えた末、「男子ばかりだから、憧れのヒーローを演じさせてやり、自分が悪役を引き受けよう」と、仮面姿の「ヒーローショー」を思いつきました。

コスプレの動画などを

見て一から作り方を調べるなど資料を集めていると、無関心だった生徒の中からも「自分も参加したい」と名乗りを上げてくる子も出てきた。一緒に小道具の製作や練習を始めると、協調性や求心力が高まり、言葉遣いも丁寧になって行きました。

「授業など学校生活に取り組む姿勢も変わるなど教育的な効果もあり、この活動への可能性を感じました」と野口先生。文化祭を終えて、「これで終わりかな」と思っていたら、「商店街が開く音楽イベントで、ぜひヒーローショーをしてくださいよ」とうれしい依頼が舞い込みました。

「生徒たちも私も大喜び。校内ではいろいろな声もありましたが、地域のためになるのであれば、ということで許可をいただいて続けることになりました。そんな活動を続けているうちにこれを部活動に一という声が高まって『地域貢献部』が誕生しました」

地域の自治会から

大阪府立みどり清朋高校
「地域貢献部」野口雄史先生



飼育を禁止されている恩地川のカダヤシ。許可をとって飼育、展示しています



ヒーローショーの依頼も増えて、順調に行っていた矢先に新型コロナ感染症のパンデミック。地域のイベントが消え、保育園や福祉施設に行く機会もなくなり、地域との交流が絶たれてしまします。これからの活動をどうしていこうかと思案しているとき、学校のそばにある川の清掃活動を思いつき、その活動をしているうちに「川に生息する生き物を地域で展示したら面白いんじゃないかな」と展示を始めるなど、アイデアを次々に実行に移していきました。

■ 今夏、廃油を再生したローソクでキャンドルナイト

4年前に異動したみどり清朋高校では、基本テーマに「豊かな人間力を育む」を掲げ、その中に「地域貢献力」という項目も。「なんとなく縁のようなものを感じて地域貢献部をつくりました。近くに川があつて前任校と環境が似ているので活動内容も大きく変えずに始めることができました」

しかし、まだ同好会にもなっていない状態で予算もない。清掃をしようにも道具もない…。実は前任校では物品の購入などは野口先生のポケットマネーから、ということも多かったとか。でも活動を続けていくためにはそれではいけないと、海洋問題に取り組む事業所や福祉に関わる企業などの助成金を申し込み、清掃道具も購入することができました。

「生徒たちにとって、自分たちの活動が認められ、それを応援するために出してもらうお金の方が価値があると感じました。もちろん責任も伴いますので、活動の重みが出てそれを感じたり誇りを持つようになりました」

今年の夏か秋ごろには恩智川沿いでキャンドルナイトを計画中。地域の飲食店から廃油を譲り受け、ろうそくづくりをしています。「今年は初めてなのでそれほど大規模なものは難しいかもしれません。でも、

まずは0から1にしよう、と。いつかそれが5になり8になり10になればいいなと思っています」

教室の外での活動も見せていただきました。校門を入ってすぐの花壇の手入れは地域貢献部の役割。その近くの倉庫でかわいい鳥のキャラクタ



花壇の雑草をぬく部員たち

一を描いた木板を発見。みどり清朋高等学校の非公認キャラ「どりいさん」（写真）。実はこれ、保育園などに寄贈をする椅子の座面です。もらった人の心がパツと明るくなるようなそんな心遣いを感じました。



「どりいさん」の椅子

研修報告「RDIについて」講師：池下沙祐里氏

2025年2月20日、法人内研修を開催しました。今回のテーマは「RDI（対人関係発達指導法）について」。うえすとさいど第52号で紹介をした当事業所の利用者が入所施設から出て東大阪市へ戻ってきたとき、クリエイティブハウスパンジーさんはこの手法を用いて、支援を構築していきました。そのときにコンサルタントとして関わっておられた池下沙祐里先生（写真下）にご講義いただきました。



まず、RDIに基づいたアプローチを行った事例の動画などによる研修はとても有効でした。RDIは主に自閉症スペクトラム障害の方への支援として用いられます。事例動画の中では自分の興味のあることにしか意識の向かない自閉症の児童が、家族との関りの中で他者への共感を学び、他者へ関心が向き始める様子が紹介されていました。またダイナミック知性とスタティック知性という考え方を学びました。スタティック知性はいわゆる「学校のテストで理解力をはかることができる能力」。ダイナミック知性は「生活をする上で2つのことを同時にすること」「他者と協同で何かをする」といった生活に必要な能力のことです。スタティック知性が発達をしても、ダイナミック知性に置き換えることはできず、それぞれ身に着けていくことが必要です。自立へのアプローチの中でダイナミック知性を伸ばしていくかかわりが必要であると改めて感じました。池下先生ありがとうございました！

イベント情報

◆アミューフェス ハロウィン

日時：2025年10月25日（土）12:00～15:00

場所：大蓮東公園 雨天決行

大雨の場合ハレアカラ 大蓮東3-5-24にて

屋台ゲーム、軽食、こま作り、ライブ演奏など

◆小阪病院「ウキウキバザー」

日時：2025年7月22日（火）13:30～15:00

場所：小阪病院1階ブルーバル

（河内永和駅徒歩5分）

出店：社会福祉法人天心会地域生活支援センターふう

社会福祉法人ゆう なないろほ～む他

スマートボール、ミニゲーム、ガチャガチャなど

昭和印刷



元気いっぱい！！春休み♪ そだちの家まちかど

3月後半から4月初旬の春休み、そだちの家まちかどでは朝からたくさんの方たちが来てくれていました。東花園中央公園や大泉緑地などの大きい公園や子どもたちお気に入りの近くの公園など色々な公園でめいっぱい遊んで、春の暖かい空気、綺麗な桜を楽しみました。新しい学年にあがる前の長期休み、満喫しました。また、3月は高校卒業と同時に放課後等デイサービスを卒業したお兄ちゃんたちに「ありがとうございます」と次の進路に向けて「頑張ってね」を伝え、そだちからも卒業証書をお渡しました。幼稚園から小学1年生になるみんなにも「卒園おめでとう」を伝えました。1学年あがった子どもたち、新学期からも頑張っています！！



研修情報

◆若年性認知症の人や家族への支援のきほん

テキストをもとに若年性認知症の理解を深めるオンライン研修です。実践に基づいた事例を示しながら説明します。

日 時：2025年7月5日（土）13:30～16:30

参加費：NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター会員は2000円、非会員は3000円

※テキストの本（2200円）も購入できます。希望される方は申し込みの際にお知らせください（特典あり）

申し込みは minnano.tack@gmail.com まで（記載項目あり、詳細はお問い合わせください）

問い合わせ先：NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター 06-6972-6490 minnano.spc@grupo.jp まで

主催：NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター

ふせ支援ネットワーク賛助会員

東大阪店舗管理センター

カットハウスAmi

昭和印刷出版株式会社

Craftbeer Tavern

一般社団法人アミュー

アトリエからふる



居心地の良い空間 アートで自己表現

生活介護事業所 アトリエからふる

今回登場していただくのは、賛助会員の生活介護事業所「アトリエからふる」で代表をしておられる谷口雅之（たにぐち・まさゆき）さん（写真①）です。「アトリエからふる」

は近鉄大阪線長瀬駅の近くにあり、障がいのある方がアート制作を行うアトリエ型の生活介護事業所です。事業所は築36年の洋館ですが、入ってみると大きい出窓から入る光で室内はとても明るく開放的な雰囲気に包まれていました。

谷口さんが事業所を開設されるとときにこの物件に出会い、出

窓がある開放的で明るい空間が特に気に入ったそうです。その空間にははたくさんの作品が飾ってあります（写真②）。谷口さんは一般企業で働いていた時に躁うつ症を発症。リハビリ治療の中で絵に出会い、描いている時間は気持ちも穏やかで安定していました。谷口さん自身の当事者としての経験から「自分の学びを生かした事業所を作ろう」との思いを強め、設立にこぎつけました。

事業所の理念には「居心地の良い居場所を創造する」というところにあり、この空間を始めとした色々な部分に根付いています。活動は利用者が「したい」と思っている制作を中心に行いますが、一緒にやっている人の活動を見て「やってみ

よう」と挑戦したり、利用者同士でお喋りをして案を出し合ったりすることもあるようで、活動の幅も広がっています。利用者の中には書道と絵をセットにしたアートに挑戦したり、篆書（てんしょ）体を書いたり…といった具合です。

取材時に筆を手に活動していた宮司昭彦（みやじ・あきひこ）さん（写真③）は、ウィルソン症という難病があり、発語障害や協調運動障害がありながらも、トーキングボードを使ってコミュニケーションを楽しめています。書道は両手を使ってダイナミックな作品を作り上げます。

ペンでのアートが得意だった宮司さんは、「アトリエからふる」で書道や浮世絵の模写などの活動に出会いました。浮世絵の下地を作るときに自分でやりたいと挑戦したところ、予想外に下地がぼこっと膨らんでしまったのですが、それが浮世絵の柔らかい膨らみとしていい味を出した作品（写真④）になりました。

宮司さんに取材を依頼したら、嬉しそうな表情になり色々なものを見せてくださいました。宮司さんをはじめ、利用者の作品は今「アトリエからふる」に展示されていますが、谷口さんは「外部のギャラリーに出展することやアートレンタルで作品を貸し出しすることで収益を出し、工賃を支払えるような就労支援事業所にしていきたい」と、今後の活動の展望を語ります。

それは、事業の展開が目的ではなく、最終的には「働くこと」を通して地域社会との繋がりを持つもらいたいと考えているからです。利用者が「アトリエからふる」という「居心地の良い居場所」で作品作りをすることは大前提ですが、地域との繋がりを持つことは利用者1人1人にとって大きな成長にもなります。

「自分自身が作ったものに、工賃が支払われる。その喜びを経験することを大きなゴールポイントに据えて、今は作品を自分で届ける、ギャラリーに飾るなど「外に出る」ことをどんどん促しています。また、半年に1回事業所内で「アートフェスタ」を開催し、地域の方々と一緒に段ボール制作や、大きな絵と一緒に作り上げることを楽しんでいます。

最後に、「ふせ支援ネットワーク」に期待することを伺うと、「うえすとさいど」の存在を挙げてくださいました。事業所をやっていると他の事業所がどんなことをしているのか、見る機会が減ってしまいます。そんな時に「うえすとさいど」で他事業所の活動や思いなどに触れられることが、とても貴重な機会になっていると語ってくださいました。地域に根付いた法人としての機関紙、これからも地域を繋ぐ記事をお届けしたいと、改めて感じました。（川本 光璃）



HP



YouTube

Instagramは
@atoriekarafuru